



大川仁政録

第四帙

伍

~ 13
3348
20



13
3348
20

近世美談 大川仁左衛門録 第四輯卷之五

松亭主八編次

第十回

囚人破牢獄跡
旅客卧房閑密話

大正十年八月廿九日寄
本大學出版部贈

頼む木の木小兩漏とい今の平馬が身の上と始の程を執事諸
老臣小懇意あるせい兵庫いふ申とも云曲て罪小落さんと勢入猛
ろくが邪を正小勝負能く今早頼をも綱も切果て委細の
様子と父平太夫方へ申送り今度の對決といふふと一雨日
痛く居らる小未と父の本へ遣りせし家来も飯り来らる一雨日
過ども又と双方共罷出べし旨申来りたるは兵庫平馬とも同注

大川仁左衛門録 第四輯卷之五

一

所へ罷出り所例の通り一同列座し大川教光申さるる先
 日佐理郷の一軸の箋と兵庫汝小問小所いふも返答ありしが
 其方覚へぬる相違有まじ平馬兼利佐理郷の一軸の箋を某
 始懇望不存せし故折と以て主人氏亂へ願ひ申受へると存ぞ
 也先日の書面も認め候所其後兵庫小賜りし故詮方あり思
 ひ絶て候へし且以て存せざりて小候と申兵庫其箋も存ぞぬと
 申さる存ぞぬも致し置んが汝千葉家の類乗るる依て嗣君
 自亂殿と配し千葉家と横領あるんて有るを以て平馬
 面色と変己し兵庫某と罪小落んと跡方もある虚言何と見
 解く尤様の難題申りしや但し証據有るを其方ありや証據と云

ら千葉家類代相傳り御朱印何故其方奪ひ取隠し置や平馬
 心中驚きいふありて此言と知りや心得をと思ひしが尤ありぬ
 体ありて去り種々の言と申りし御朱印の箋へ先達田積互途中
 小於く奪りし故切腹と申付らるる所其方が計ひし追放
 あり内く其詮箋も心懸べと所をありし掟女小馴染情死は
 君父の名を汚る程の虚気ある棄るるも偽りありし小
 中知べし夫と何ぞや我知るると言ひおげ小陣より兵庫
 大川彦小向ひ彼者共此所へ召出し候て苦しむ同敷や同
 小苦しむ是れ呼出さるると有る小吏表小向ひ夫小扣
 へし兩人の者罷出ざると小アツと應へて入来りて見し一人

首桶中の物を携へ一入を一つの箱と抱へり兵庫へ平馬は
先日罪小伏べうと今日逆寛けり故罪小罪と重なる
今早陳ぶる道多し人彼者共と能見とつて平馬目と田
て是と見るとまをいふ一人を先達く品川に於て白糸と情死
たしる田積且一人を兵庫が方より逃来し堀権次と入る者
あり平馬心小不審晴せいふと支中んと物もへく白眼詰
て居り教光声も玉ひいふ平馬あまある若者と見知りや
と申さんまはアノ者兵庫が家来ありが兵庫非道の成敗あり
んとせし故某方逃来り助け呉しと申故抱助遣りし堀権次
と入る者もく候と答ふ汝あまや彼もと田積隼人が次男と伊

豆屋喜兵衛が養ひと、しと三郎なり今度大赦行くと流人の者
共赦免の所彼一人赦小外まは是も子細の有度あまが本とあ
せむ我々始有司共の過ちと然るも母と討ま兄の横死の由と
憤発しと鳴と抜出れと報り其上とて訴へ出り刑と待所存
るが穿鑿嚴敷由と因身と五郎兄小本意と逐せんとと三
郎と名乗自ら訟へ出り由と因身小罪と負とて己まと名乗出
る故能く詮義あせむ如此くの由と申故赦小外まは本末と
糾さんと思ひが彼小本意と逐せんと其度と後めしと仮り小
五郎と苗置須く放ち中しこと仰とまは兵庫語と續然り
汝又子が有る心得とと思ひ故密計つと汝が方へ入込と

主君氏胤主と申合と一是苦肉の謀あり平馬も是と聞及毎り
 肝と冷し色と変じて扣へり三郎平馬と見て我幼年の頃逢し
 のまゝ其相貌変り故与三郎も知ざり一軸と取来りむ
 重く用んとし故榛殿と申合と一軸と餌小御朱印の詮義と遠
 し所父平太夫汝が状と見てり覚期と極め我小父錯と頼と切腹
 ろんと甘し折柄御朱印と取出し焼捨んとあせし故奪ひ取
 るはあり我母飛鳥と討も汝が仕業と知る恨とを隠して仇小
 後ひも此御朱印と無及又取得ん為るも一む且も共小勇
 立我も都築主水と変名し世と忍ぶ内汝が為小計らと既小命と
 落さんとち折柄妻小鷹の我小代りて白糸と俱小死し困と

解しふり其場より立去り世と忍びく都築主水の白糸と情死
 ろせしといくそい汝も油断をせん為る然る小身のと三郎より
 如此くありといひあせし故密小汝が家小忍び居く平太夫が切腹
 ろる首討落して又事人と俱小主君氏胤主へ実檢小備へ一処二
 品共小兵庫が方へ持参しと仰と受く斯の仕合と一部始終と聞
 毎小平馬の胸小釘打加く惘と果て居りける教光声りあをま
 彼奴と縛り牢舎とて詞小小吏立寄る様り下へ引下し高平
 小手小縛りく牢獄へこそ下りる五十嵐父子より賄賂と受平
 馬小荷膽の人くも斯成行く詮方多く口と閉てぞ扣へり
 榛兵庫も何と人恩謝と速く式礼し且与三郎と引連御朱印と



源左衛門と久治

源左衛門と久治
角力の家

源左衛門



久治

久治

守護ありて旅宿へアそ引取くる然る其夜平馬を獄屋と破
る何国へり逸失より是れ牙狩剛藏より内々頼より依り幸野万
藏鹿毛手理金太ホ計らひく牢獄を逃り物あり大川彦此由と因
四境と堅めを詮義ありても更不行方へ知まざるより榛田積の人
今更手小持る物と取落し心地と口惜く思へどもあまき様
あくさるば互兄弟国と経廻り譬へ何国の浦も忍ぶも尋出を置
べと既小発足の準備とぞあふも復説金神久次と先の日
与三郎と俱ふ海上ふて風雨の難に遭ひ波ふりやまき前後もあ
ど生死とも別ざらるる中や有て心付ゆると見まば空晴渡りぬ
日を西小傾き其身へ元の大鳥へ吹寄らる岸小打上らまてありて

ちそをいふふちと更ぞ与三郎刀拵ふ何とせしま中んと傍り
と尋ぬる影が小も見へど扱最前の風雨何国へ吹流されま
らる荒波ふりぬまていふある者も堪らま若水中ま空
敷まり玉ひる心と尽き更も画餅とある我の生く何うせん
まあ二度三度観世音の加護もゆま何国の浦へ無更ふつと
命小別条ありとも知るくば一先立飯り彼人の行衛を尋
んと思ふ我あがらふ小ちる覚へねど右の腕強く痛く少くも
動くも更あはれ是れ中へ船ありてい叶はれと心あはれども大鳥小
日と送りくる或時凡小漂ふらる舟一艘大嶋へ着り何国の舟あり
やと問ふ上総の木更津の舟ありといふ譬へ何国もせし便船

して其上より兎も角もあまふと此舟と頼りて大嶋を出木
更津迄来り直様発足せんと思ひし小船共今日を此地の神
々相撲あり見ゆ行きたると久次も兼く好む更あまは連
今迄日数経る身のみ一日と争ふもゆきぞと思ひ然らば
見物あまふと彼船頭小伴は行見居りし此角力の土地乃
若き者共打寄りて祭礼の神更あまを更あまは見物の中より飛
入ふ入りて取者も多かりし船頭共久次小向ひ見ゆ知が位も好玉ふと
見へり飛入りて一番取玉をぬくと久次我も以前に好む相撲を
取らるるが近き頃を止り其上先日腕と痛め漸近頃治りし共
中取難しとふと船頭共見ゆ通り是ぞとふと者も亦休の

相手不足ありと痛所へま本腹をばといふと却て
らんと達く進ゆ故え来好む所あると慰ふ一番取て見
んと出たりし久次が手又立者一人もあがりし赤回源左門
ち最前より此体と見居りし他より来り飛入の者小斯
勝と取て此木更津の耻辱し我渠と相撲て勝負と決
渠う鼻と挫んと土俵の中へ飛入我と當所の赤回源左門
かう余り手並の見更あま相手も不足ありと今日相
撲も是より終あまの詰の勝負と決まるとか足踏鳴りて土地
の耻と雪んと勢ひ猛く身構り久次思ひ赤回源左門といふ
名に兼くか富の物語りゆりて因り彼を此土地の悪者ゆき子分も

多くあるう彼奴も勝あの中く不恨と受く災ふと引出ん去
連我も金神の久次と呼まき少く人ふも知うとも身の負あ
後日小口の端ふりも無益しうあき支と仕出しう今更引
も引まき時美あまの勝ど負と取分度物ありと思案して
ど連互ひ取組しが源左門と此相撲負あ土地の耻のあ
子分子方の者追も此後我と侮んと金剛力を出して相撲も勝
支能く辰半時余りも揉合らう小互ひは息まき勢力芳まき
く行司を双方引分て水と与へ又取組んとまらうが久次云
你の高名へ兼く因り我も又鎌倉しういゆく人々の知らま
金神の久次とらる者まう今爰も勝負と決し何まが勝と左

のく高名手柄もあし今この相撲も取分あふ互ひ不笑う
別まをへくつと源左門も久次も力量侮り難く望むわ
多まへ大不悦いし通し勝ても負ても互ひり益あま
むさくは是あく取分らふし是と迎付の種として今宵も我方
もて一宿も多近付あまの盃えんとつと久次も否ともい
源左門小伴くも其夜も赤間が方ま酒汲らう頃く一回小入
休も多う夜半頃と覺し頃赤間が門と叩く音しん久次が
臥ら次の間小入来し様子あま源左門が声して何支が有て
今頃来玉の其上只一人怪しけある出立いりある子細も
つらま今度如此くのまき鎌倉の問注所も於て搦兵庫と

對決不及び所筒様くの夏より事の敗と成我又も既不切腹
一玉い一所田積且小首級取先達て其方と語ら奪取
御朱印も且が身与三郎う爲小奪の故と我も罪極り牢
獄へ下とましくと如此くの訣あり獄屋と拔出道とん共指
當り路用迎もあ指行方もあまの汝と頼て須く世と
忍小へく思ひ来りう暫くかくすの吳回敷や源左門是と因いと
安と夏と去あり鎌倉の牢獄と拔出とんうの詮美も嚴しう
べしといへう様とも思案と爲のあく一兎も角も今宵の逼苗客
河まの委敷夏の翌日又因り向もえん光休玉へと云久次を
此様子と次の間小臥まう因居りう密中不物語と委細

因とん海も極と此奴の五十嵐平馬あり且殿与三郎刀袷も無夏
小此世不在と見へり牢と破とつとつ定り行衛と尋居
玉人我大島へ行与三郎殿と伴い歸り功と立んと思ひが其人と
と行衛と失ひ我も昨日追大嶋小有て空敷古郷へ飯り行ん
本意あ夏小思ひう今宵此家小宿りうと平馬が様子と
因り一故古主小逢うも面目有と心小悦ひ左ありぬ体と翌
日暇と告く此所と立出兎が如くに総及る田積家へ馳行
不免天誅惡輩亡

第十一回

善男女茲遂素懐

復説赤間源左門と先年与三郎と鯉屋へ連行三百兩の金子と

搦取しより益悪業増長し人小忌嫌り物々同気相求る悪輩
共々適き赤向へ強傑なり放蕩者の仲間々々関の東うて何国
へ往て親分と立ち彼が右不出る者も何と虚名高く関へ
国より暴者共身の不成難さ者赤向と便り尋まり親分
と称して是小属より者多り々々彼信及路よてお富が親右
門と害す簾の鬼藏馬籠の牛妻菟の六をくら者も悪吏つ
のり其知と拂くと身の置所を小流ま来り赤向が属
下と成居り去り平馬へ元主後り始り五十嵐又子小
一味も腹心の吏あま子細り兼諾饗應置ると平馬々
少し心安堵さんと此所々千葉家領内へ程遠く長く足と魚と

要地より源左門小此由と語り有り高談あせり源左
二門其吏と兼て工夫あり置り奥州福富あり我兄弟の如くあそ
者り此方頼と遣えんと思へも人傳り支辨し難し我小同
道々々平馬悦ひ然る何分能ふ頼むことつ故旅行
の支度調へ留守の吏打申置子分の者十人計と伴ひ翌朝未明り
出立あえんとつ故途中迄送り行くと皆く出まり其夜を酒汲り
居り中夜も明近くなり頃平馬源左門と始り俱不出立あそ
者共々起出朝食一頓て立出んと思ふ折柄誰か表と音あふ
者あり誰あそと門と明り我を金神の久次ある主へ宿ふ
居るやとつと奥へ行んと彼者押隔り親分遠方へ出立せ



与三郎



水王

あまの
末間の
見よま
主水
仇と
家

らう、あま、其趣と申べ、須く爰に待て、と久次は様
去る、更と因、故明と待を来、と主小逢人と掻退て行くと
そろそろ狼藉ある、外に客人もゆき、奥への中、と引戻を、非
たひらぐ、みと双方へ投退、まゝの曲者あり、出合、と呼、ん、心、子、分
の者共、ぞ、く、と出、来、り、久、次、と中、小、取、巻、り、此、時、跡、ろ、入、来、り
二人の武士と此体と見、声高く五十嵐平馬、何処、の、田
積、豆、同、身、と、三、郎、来、り、ら、比、與、未、練、小、逃、隠、ま、ん、出、く、勝、負、と、決
ま、り、と、高、ら、う、小、呼、と、ま、の、平、馬、源、左、門、是、と、因、板、と、此、所、不、忍、ぶ
更、早、彼、ホ、知、り、ら、し、り、先、の、夜、久、次、う、嗅、知、く、彼、ホ、小、告、し、と
覚、り、去、と、て、彼、奴、ホ、何、程、の、更、う、有、人、追、取、籠、て、討、取、と、云、程、を

あま、属、下、の、者、共、我、も、く、と、踊、り、出、抜、連、く、切、て、く、と、久、次、は、是、ホ
と、引、受、く、當、り、任、ち、ま、難、ま、ま、先、小、進、く、者、共、を、中、う、の、小、四、五
人、手、負、て、表、の、方、へ、逃、出、ら、り、門、の、外、う、の、棒、り、付、ら、ま、ら、捕、手、の
入、く、取、逃、と、ま、と、扣、へ、ら、し、く、と、待、と、取、く、押、へ、皆、く、繩、と、七
掛、ら、り、ろ、ろ、さん、も、内、う、の、是、と、知、ら、ん、多、勢、と、頼、ま、小、進、む、も、ら、ま、六
手、並、小、恐、ま、く、逃、ら、も、あ、ま、入、替、り、く、久、次、と、相、手、小、戦、う、ら、ら、の
向、小、三、郎、の、奥、と、目、が、あ、り、走、り、入、源、左、門、の、何、所、不、あ、る、伊、豆、屋、と
三、郎、先、速、て、の、返、礼、を、出、し、く、と、呼、ら、ら、り、源、左、門、是、と、因、小、さ、り
し、く、小、童、子、の、息、の、根、留、て、呉、ん、ど、と、大、股、指、と、引、提、く、頭、の、上、出、
已、先、年、命、と、取、べ、と、此、赤、間、が、慈、悲、心、と、助、け、呉、ら、恩、義、と、わ

と此家へ足と踏込し燈火圍ふ夏の虫觀念多せといひ長刀
引抜く真向小一討と打く来り公三郎も太刀抜る
五十嵐平馬小荷膽しく鈴ヶ森ろく室と奪ひ赤間源左
門覚期と互ひ遠と窺ひく十合ろく戦へどいせ勝負
見へざりろく田積互々平馬と尋糸一向の内へ入ると思ひ懸
小蔭より突出と手鎗と身と捨り塩首取と引出さ鎗突捨
太刀抜るろく死で出る五十嵐平馬も辟と拜と討小豆が真向
打懸ろと掴し鎗と刃付ま平馬打く太刀の冷小鍔ハ二
ツ小切折く左右へ遙小死散る此向小豆太刀抜放し比與至極
の今の振舞母の敵の五十嵐平馬サア尋常小勝負せいと志す

くと詰寄まを我爲ろ父の仇恨る同ト平馬が又受て見よ
と打く懸ろを左知ろろ受流し互ひ小得る秘術と尽し戦
ひが平馬豆ふ及ぶと打込太刀と受損ト弓手の二の腕切付
らまおち叶りと進行と切入行んとせし所へ赤間と三郎不切
空れ奥庭より来りし何国逆りし三郎追来しに思ひも
寄ぬ椽の下より三三人頭も出与三郎が後ろろ打てる心得
ろと振返るる拂ひ切小一人と切く落し残る二人と戦ふ内源左
エ門が後ろろ打込刀ふろり色と三郎を討まんとせし如へ互々
是と見るろりも平馬と追捨源左門が横合より打込太刀と刃上
ろり是小驚る源左門ひるむ所と返そ刀小肩先四五寸切下ま

此間小三郎又一人と切落し残り一人叶とと裏口より
逃出ると爰も捕手の固り居て押へて縄とぞ懸りたる平馬
も俱小出んとせしが此体と見て取ら帰る赤間を既小三郎小
右の腕と討落すと衣りの手小刀と持死ありと小荒廻ると二人
が中へ扱と相討みとて去りたり此体と見ると五十嵐平馬逃る共
逃すとと思ひ小三郎も面も振ど兩人小打と懸ると巨声くも初太
刀を一太刀切付より二の太刀の汝小譲ると兄が詞小三郎平馬小
渡り合二打三打ち合しが我母人とい斯く切るといふ方より真
向へ切付まゝ流る血汐取小入り盲目打小切と廻ると難く兩人
して討首より金神の久次を始より多勢と相手小戦のうが分内

狭き所あるまゝ赤間が属下の者共を味方却て邪たふ成り思ふ中
あも働より久次一人小切立ちと或と討ま又い手と肩外面へ逃れ
押へら最敵一人もあふりたり此赴と裏表小固りし捕手の
人へに通しとまゝ生捕と引入来り先討まる者と展檢するふ
即死と平馬源左門の外小八九人何れ手肩を十四五人小及び捕ま
る者廿人小余りたる斯る所へ表の方より入来る女あり何者ある
と思ふ所小是か富あると三郎見ると去るいりて来りていりて
さまは此間如此との由告知玉りしり頃と母御の仇と討本
意と遂と歸り玉とんと心小嬉しく思ふ物り又能く思ひ見まは
赤間名小あふ悪黨とく是小後小属下の物さ人多くまゝ若連の

有りやとんと案づく見まばかりせあり思ひ過しのぞりまば内を
 物と思えんより行ぐ様子と因むやと小太郎主の乳母の所へ預け
 置跡と慕ひく来りて今如此くの夏ありと道行人の噂を
 聞飛立よふと思ひまき我と忘れ来りて人々小挨拶は
 傍りを見ろ小生捕の内小其昔大平の山中より父母と討り
 鱧の鬼藏の居りたるをいふと驚ひく小三郎小河まきと依
 小物語り一妻が父母と討り鱧の鬼藏とふ者ありいふありて
 ろ居りし中んとりよふと三郎渠と引出して汝々信州路小居
 鱧の鬼藏とふ者ありやとりよふと然りたり小然らば先
 年々々くの夏有つんとりよふと鬼藏左様の夏を知らざるとりよ

お富々々を伺く確と怒り己まへ程陳ぐる共今へ叶り其時の小
 女と我ありと小鬼藏おとみと見え大さ小驚き今へ包む共及
 づと思ひ有の終小白状あり其時の駕屋馬籠の半妻籠の六も
 爰小居まるとりよ故お富即死手負一者で見ろ小三郎小討と
 討り父母の仇と報りせ本意と遂げ玉りるとりよ故捕手の頭人
 右の由に申あへり中りとも計り玉へとりよ故鬼藏縛と解捨と
 三郎久次助太刀ありと小富小ま合せ首尾と本意と遂げせ
 たる叔直と三郎と平馬が首と上り母飛鳥の尻と祭まばお富又
 次も俱小同向なりお富と鬼藏小三人が頭と持く右門夫婦と

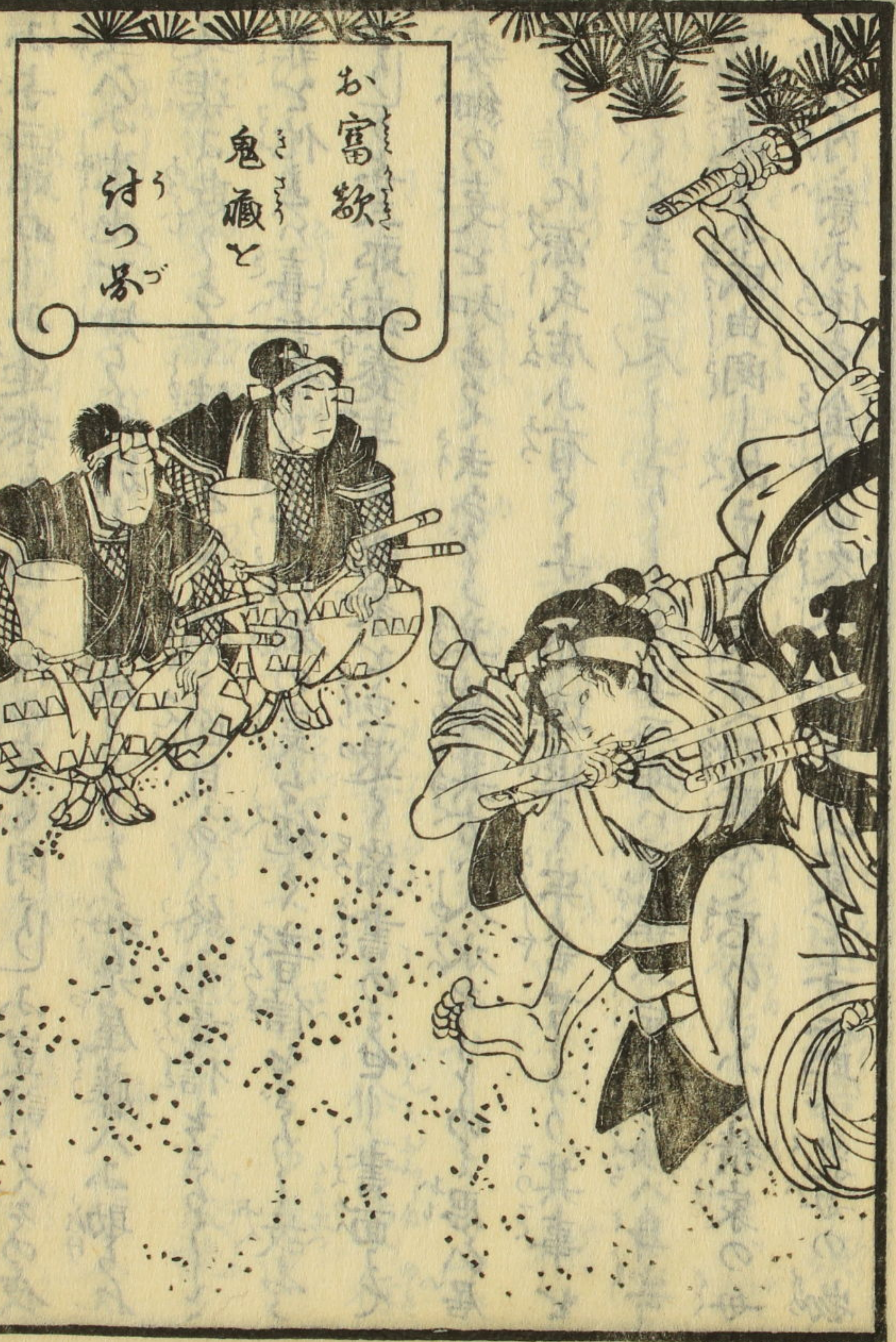
と祭り多年の本意と爰不果しう叔直と三郎と搦り添らじ
人々と俱不召捕一者共と引く鎌倉へ立越大川侯の官邸へ右
の赴と具小訟へと三郎へ按と破り罪と乞ふ久次と三郎大
嶋と抜出へ當人小罪あり其誘引出りある其と罪と乞ふ
由と願ふ大川侯と三郎寫と出へ孝の爲りて私意と以て
滋と犯り不あは殊不渠一人赦不外とら我と始有司共の
過ちあることども免しあるん寫と出へ上と蔑ふせし罪なりと
まとも此一条に付自ら罪と乞ふ者三人不及殊小いなる罪科
ある者も已まると名果出る時と罪一等と宥せ輕ふ行ふは是定ま
まら法あり免む角も此裁断を追て沙汰とせしと其日ハ子の依

歸ととより

第十回

貞婦殺身清耻辱
賢臣分邪正重法

陽気発する所金石透る精心一度至く何夏うあうとんとと三
郎が富へ多年の望と爰不達し俱不伊豆屋小至り如此くの由と細
中ふ物語り今追種くと物と思へせし不孝の罪と佗まは富も疎
遠の罪と佗又右門殿伯父御と便りて鎌倉へ下りて途中に於て
不慮の横死と遂げ我身を此地へ身と賣らと伯父御の夏と尋
ねて思ひくど去る身の上と尋ねんも伯父御の外聞あんと
尋ねり小本更津ある赤間源左門小伴とと彼地とく不思議



う小白紙小包みし物なりといふ物ありし秘置し小此頃
見まへ金瘡の妙薬とありくと頭之酉の年月日時そらひ女
心の臓の生血と合一疵と洗ふと傍小記しし妻が年支小所ふ
との小白紙小自然と文字の頭りし是も一ツの不可思議して
大慈大悲の妙智力疑ふべふありし終に迎も死をて毒が
命价の妙薬小ありし是小ゆし悦わじ早く用ひく茶の奇
特と見と玉へとて書りし三郎是と見く去を思ひと寄ぬ支
と因りの小譬へ我為小妙薬とありし迎人の命と以て茶とか
とと斯る不仁の法なり殊小你を我妻ありしや是と見
公五倫の道小欠る何とて是と用ゆべきやと小富是と因て

その小妾が心と知り玉とぬ故なり妻父母と討し時鬼藏が為
小此身を搦ると其時死めし思ひが父母の仇と討て後小死を
と遅くしと覚悟して妻篋の六が為小身を賣し赤痢を為し
謀らむと渠小身を任し伴りし又和泉屋藤八小欺りて身と
汚し女子の貞操と破りし父母の仇と報りし為とり去る小
俗の影と日頃の念願届き鬼藏と始り六牛追も俗の手と借
討取し本意と遂し上りし今も此世小思ひ残を度は何面目
小世小交ふと死しと耻と清むる兼ての覚期ある物と今も
俗の志を宣ふとも妻生むと命を任しと小富を自ら乳の下
搔切し早く用ひく試み去と進み小今更人くものありし

なく流る血汐と器不受彼金瘡の妙薬と以て三郎の疵と
拭くと忽ち小洗が如く古疵愈く元の次女と成ふなりお富を苦痛
も打忘ま此有と見く寛尔と笑も眠るが如く息絶り借りの
一条も捨置るふりうごま早連大川疾へ詔へる小教光を富が
孝心貞烈と感心有くと三郎篤と出罪を先日申如くあま
い法と正と追小飯小須く流罪申付べく思ひけりが觀世音の
冥助とらにお富が切なる心底うく金瘡全く愈く元の如く成り
上の今迄の切らま三なり依くと三郎の罪と宥め久次が願
ひ小任と渠と江の嶋へ流罪なり法の表と正とべくと久次と須
く江の嶋へ遣りま須く召飯とまる田積巨と本國へ立帰る

委細言上り所氏亂父子巨が誠忠と感心なり自亂も今迄信者
小誑とまを後悔有くと巨小百五十貫の加恩有都合三百貫の
地と賜り物頭とて申付らまると三郎へ養父喜兵衛伊豆屋
の家名と譲るべく申すに三郎達て辞退り弟と五郎より伊豆
屋の家名と譲りし公然へ兄右門の名跡相續し呉へま由申
小依くと木辻の名跡と相續る一兄巨が須く世と忍び一飯の名と
續く木辻主水と名乗るなり千葉家より新規百貫の地と賜
り召出さんる弟と五郎を伊豆屋の名跡と續ぎ久次と千葉
家の新規召抱ゆま由あり所達て辞退り父の遺言を守り
田積家へ歸泰と望まるとまの田積父子渠が忠節と感し五十貫の

地と裂子へく客分とあり置る子三郎が乳母ハ再び嫁く夫
も身亡り駉子一人有るはバ子三郎引取身とあり養育
田積木辻伊豆屋の三家永く子孫繁昌なりは夫より以前
大川教光へ巨等が召捕来り者共一鞠問ひ平馬が半
と破り出らん幸野鹿毛手等が計らひの由迄明白不言上り
彼ホと召捕穿鑿ある小牙狩剛藏より頼まき卦と申そ爰ハ
於く剛藏も召禁め鞠問あるは始め子三郎赦不外りハ五十嵐
平馬が頼小依り有司と欺と指へり依て一人取残さき迄明
白小白状小及びびく夫らかぐらへる者ハ或は役多と取放し
へ遠慮閉門小罪の輕重に依て取行ひ剛藏万藏理金太の三人

共身身職子有るは主と賣權と借と職と裁り罪輕うらどと
有るハ丈鳩へ遠流申付ら内ハ山の内なる上杉家へ千葉家の重
室依理郷の筆跡返らる旨申送らるる是も剛藏計ハ
らく留置まき更故早速戻らん又赤間が屬下の者ども
罪の輕重に依り死刑又ハ流罪輕ら追放小申付ら此一条
のハ落着小及びびく大川彦子三郎赦小洩らん我ら職小
疎あり過ありと有る職事と辞し出仕と勇罪とをまを成
氏感心有る教光過らハ過ら罪とを共政道小心を委
任私まき故斯の如し今教光職と辞し誰も是小續べり有る
元の如くく由建く命どくは教光君恩と謝り元の

龍前の士人東條國書幼年して父助を
夫が仇山中壯二郎を年久く伺ひ探り後
小和州郡山日く復讐せし事實と添
て路常の借奇事紙と異あり

南都 小栗忠孝記 五冊

奥州南於の士竹内新吾月藩子新志の士
小栗毛平と結み竊小人をて討殺させし
小栗が復讐助終子と澄如とをり得
阿波五小和主の妻子小告知とせし小栗
万二郎小悉く父の仇を報せし事實あり

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊

和漢の雜事何れをて取れられ世に傳
益鮮ありて一に聞くと爾足を知りて

元一千奉方若のハ等と書は第の大井宿
の飯盛御湯のハ 女憐めて計て櫛金
換る急難と免と成り 奇種最面白

金屋金五郎全傳 五冊

浪花堀江の市人金五郎が風情ありて
南越額の小が情実の懐をむせ死さす被
半所淵左衛門の癖性ありて夫は後小栗將庵
陰と事して離人との一小説あり

輪廻物語 五冊

安信仲麻呂吉徳大臣亦の後唐より安名と
高麗より 聰明及海多事と悉く俗談の
終る故を以て死かと一海屋陸陽両方乃
既を附合し小鏡荒唐して架空の結構
和漢の史外一本一奇話といふ

風流茶人氣質 五冊

續湯獲鯉山石見英雄録 全部 五十冊

南流 玉藻 主人 編輯

○初編 糸御人作 ○二編 玉藻主人翻著 ○三編 東陽子嗣著 第四輯以下作者一家
永鑑天正の海統赤名嶋の勇力士若見重太郎備後李が生さしり武者修好
せし世の武勇大蛇の害を消き老狸の妖を斬め勇威を振り後天の橋より
廣瀬成瀬の川中三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し終小室町殿に奉仕して任官
給小栗水正の敵を殺れるも同じく至る事高が女那潘婦岩懸孝が新月中子
給一黨の玉雄と結むる勇士の列傳靈接悪魚の怪談亦五輯より益入佳境新言あり

南久寶寺町心齋橋小五入

浪花書肆

前川善兵衛藏

